

“The Affectionate Kidnappers”における Witi Ihimaera の狙い: Katherine Mansfield の “How Pearl Button was Kidnapped” との 違いをめぐって

三 神 和 子

I 初めに

ニュージーランド生まれの作家 Katherine Mansfield (1888–1923 年) の生誕百年を祝って、ニュージーランドのマオリ人作家 Witi Ihimaera (1944 ~) は 1989 年 *Dear Miss Mansfield: A Tribute to Katherine Mansfield Beauchamp* を上梓した。この短編集は序文にあたる “A Letter: Dear Miss Mansfield” のほかに、1 篇の中編と 13 篇の短編とで構成されており、Ihimaera が “A Letter: Dear Miss Mansfield” のなかで、Mansfield にたいしてここに挙げている作品は「あなたの作品の “variation” である」と述べているように (9)、¹ 中編、短編とも Mansfield の作品を下敷きにして描かれている。しかしながら、この短編集を読んでもみると、違和感が残る。Mark Williams も “The book is indeed a tribute to Mansfield the writer, but it is one that undermines the festive cultural nationalism of her centenary...” (334) と言っているごとく、Mansfield への “tribute” であるにもかかわらず、この短編集は彼女の百年祭のお祝いムードを崩している感じがする。マオリ族の誇りを謳い、マオリ人として Mansfield の属する白人社会、パケハ² へ挑戦状を突きつけている感じがする。それに、Mansfield の作品のヴァリエーションであると言っているにもかかわらず、Mansfield の作品の意図を活

かしているとは思えない。活かすどころか却って逆の主張をしているようにさえ思える。はたして Ihimaera の意図は何か？

Ihimaera のこの短編集の中で “The Affectionate Kidnappers” は、すぐに “How Pearl Button was Kidnapped” を下敷きにしていることが判る作品である。³ タイトルの中に同じ “Kidnap” という言葉が出てくるせいでもあるが、主人公 Pearl Button の名も登場し、Mansfield の作品をそっくり受け継ぎ、Mansfield の物語の続きという形で物語が展開しているからだ。まず、Mansfield の作品を読み、彼女の作品を明確にした後で、Ihimaera の作品を読み、違いを浮き彫りにし、Ihimaera の意図を考察したい。

II

まず、Mansfield の “How Pearl Button was Kidnapped” を読み、この作品における Mansfield の意図と考える。この作品は 1912 年 9 月 *Rhythm* の 2 巻 4 号に掲載された作品である。粗筋は、幼児ともいえる小さな女の子 Pearl Button が一人で家の前の小さな門に足を載せてブランコのように漕いで遊んでいると、二人の大柄な女の人がやってきて、彼女を海辺へと連れて行ってくれるというものである。この間 Pearl は一度たりとも淋しく感じたり辛い思いはしない。それどころか、彼女は「こんなに幸せだったことは前には一度もなかった」(287)⁴ と思うほど幸せになり、喜びにあふれる。歩きくたびれたとき抱き上げてくれた女の人「ベッドより柔らかくて、いい匂いがして、いつまでも顔を埋めていたいほどいい匂いがして」(286)、馬車に乗ったとき膝の上に抱いてくれた女の人「猫のようにあたたかで」(287)、そして女の人たちの仲間のところではやさしくされて「嬉しくて」(286)、Pearl は今まで経験したことのない幸せを感じる。そして生まれて初めて海を見て、その「暖かな海」の中に足を付けて浅瀬を歩いた時には、彼女は興奮して「素敵ね、すてきね」と声をあげて、女の人たちのところにかけて戻り、女の人に抱き付いて首に手をまわして思わずキスをした(288)。

この「茶色の皮膚の女の人」(dark women) (286)、つまりマオリの人たちの世界は、Pearl の暮らしているパケハ (ニュージーランドの白人) の世界と対照をなしている。Pearl の家は四角い箱型の家 (the House of Boxes) で、母親は几帳面に、曜日ごとに家の仕事をこなし、Pearl が海へ連れてこられた火曜日はアイロンをかける日で、Pearl が出かけたのにも気づかない。人工的な時計の時間の区切りに沿って暮らしているのだ。そして、Pearl にはマナーを厳しく教えられている。彼女は埃っぽい土の上に座るとき、埃っぽいところではそうして座るように教えられているとおり、エプロンとドレスをたくし上げて、ペチコートの上に座る。そして食べている桃の汁をこぼしてしまうと、「恐がった声をあげて」(287)、「こぼしちゃった」と言うのだ。時計とマナーと人工的な秩序のもとでパケハは暮らしている。

一方マオリの人たちは靴もストッキングも履かず、四角い箱型の家 (the House of Boxes) も持っておらず、男の人たちが事務所に仕事に行くこともなく (288)、食べ方についてうるさいことを言わないが、いつも微笑んでおり、おおらかである。彼らは時計の時間やマナーなどの人工の秩序に煩わされることなく、自然のリズムに合わせて、自然と一体になって暮らしている。そこではどんな不愉快なこと (nasty things) も全くない (288)。彼らの住処はもちろん Pearl が立ち寄った長い大きな部屋のある小屋だが、精神的には、彼らの住処は広くて暖かい大海である。この大海は四角い箱型の家 (the House of Boxes) と彼らの精神性や価値観を表す対照になっている。パケハは窮屈で人工的な価値観に基づいて暮らし、四角い牢獄に閉じこもり、マオリの人たちは自然と一体になって大らかに大海をたのしむ。窮屈な牢獄に閉じこもるパケハは、広いあたたかい陽光の降り注ぐ世界を知らない。Mansfield はマオリの人たちの世界を人工の秩序から解放された自然の世界として位置付けている。彼女は自然に沿って暮らすことを退化とは思わず、もっと積極的な価値を与えている。

Mansfield はマオリの人々の世界を肯定していることは、彼らがあたたかくて、いい匂いがして、いつも笑っていて、Pearl が幸せであることから明

白である。Mansfield は白人の価値観の世界が絶対至上ではなく、他の価値観に基づく暮らし方も人間を幸せにすることを言いたいのだ。しかしながら、結末において Pearl は家に連れ戻されることになる。「青い服を着た男の人」が、Pearl を四角い箱型の家 (the House of Boxes) に連れ戻しに、大海で楽しんでいるマオリの人たちのところに走りながら、そして警笛を吹きながらやって来た。警官がやってきたのだ。物語には述べられていないが、Pearl の母親が自分の子供が誘拐されたと思って警察に捜索を頼んだのだ。法の秩序によって、すなわち、人間が勝手に作った人口の秩序によって Pearl は幸せの世界から窮屈な世界に連れ戻される。Pearl を連れだしたのが Two big women であるのに対して、連れ戻すのが Little man in blue coat であることは、Mansfield の二つの世界に対する思いが託されている。この「大きい」と「小さい」の違いは、パケハの世界よりもマオリの世界への誘いを Mansfield が支持していることを表している。

このとき、警官が Pearl を四角い箱型の家 (the House of Boxes) に連れ戻しに来た、という言葉でこの作品が終わることは意義深い。マオリの世界がどんなによいもので、Pearl や人間にとってどんなに喜ばしいものであろうと、Mansfield は Pearl がマオリの世界に暮らすことはない、つまり、マオリとパケハと二つの世界は互いにまだ分離していて、統合することは今のところ難しいと考えている。もちろん、Mansfield は二つの世界の統合を願っている。Aloe と Prelude において自然に沿った小径と整った人工の小径があって、その二つの小径がアロウの木につながり統合されて、花を咲かせるのを待っているように、Mansfield は自然と人工の秩序、すなわち、西洋文明と自然に即したマオリの世界が統合する日を待っているが、その花が百年に一度しか咲かないように、なかなか難しいと思っている。

Mansfield 自身のなかでは、この二つの世界はすでに統合されている。彼女にはマオリ族への偏見はなく、彼女のウェリントン時代の恋人はマオリ人の Maata (Martha Grace Mahupuku) であり、その恋人からタイトル名をとった *Maata* という作品では、自分がマオリ人の Maata という名の主人公

になっている。もっと正確に言えば、彼女は国家や人種を超えた存在になりたがっていた。彼女がロシア人の筆名 (Boris Petrovsky や Katerina) やドイツ人の筆名 (Kathe) 等を使ったことは、彼女が人種を超えて様々なものが入り交った普遍的な統合を目指していたことを教える。

III

次に Ihimaera の “The Affectionate Kidnappers” を見てみる。“The Affectionate Kidnappers” は Pearl を大海へと連れてきてくれたマオリの二人の女性、Kuini と Puti が白人の少女を「誘拐」した家で牢屋に入れられているところから始まる。Mansfield の作品では Pearl を連れ戻しに警官が来るところで終わり、警官がマオリの女性を逮捕したり連行することは何の示唆もされていない。しかし二人はいくら警官に白人の女の子が自分たちの仲間になりについてきたと説明しても聞き入れられず、牢につながれ、困惑する。そこに彼女たちの種族の酋長 Hasbrick が訪れ、二人を諭すのだ。Hasbrick の諭す内容は二人の行動がパケハたちの誤解を生むという内容であり、パケハや白人一般が如何にマオリ族や白人以外の人種に対して偏見を持っているか、その偏見の内容を披露するものになっている。まず、二人が白人のブロンドの幼い女の子を連れてきたことに対して Hasbrick は次のように言う。

Not only was this a white girl but this was also pretty as a picture blonde girl. Pakeha didn't like their girls being messed around by Maoris. The idea of a pretty curly-headed white girl being taken away by Maoris brought all sorts of pictures to their minds—sacrifices to idols, cannibalism, of white girls being captured and scalped by Red Indians s—and he knew because these were the sorts of questions tourists asked him. ‘Do you worship these wooden gods?’ ‘Are there still headhunters in New Zealand?’ ‘Do you have tomahawks?’ (111)

酋長は白人でブロンドの女の子を連れてくることは白人の中にさまざまな

憶測を呼ぶことを、その憶測が偶像のための捧げものや人食いのためや頭皮を剥ぐためなど、実に滑稽でばかばかしい、つまり未開の人種に対して白人が一方向的に作り上げた画一的な内容の妄想を抱くことを教える。彼はガイドの仕事もしているので、白人旅行者から質問を受けて、彼らの無知と偏見を知っているのだ。

つづけて彼は二人が女の子を海へ連れて行ったことも、桃を与えたことも、良くなかったと説明する。海は溺れるかもしれないので危険であるし、彼らの食べ物汚いと考えられているというのだ。彼の頭の中では、Pearlの母親の声がいまだにガンガン鳴り響く。

Oh, Pearl, did you eat something from the floor? John, darling, did you hear what the Maoris did? They forced food on her. There's no telling what sorts of diseases she got down there. All those dogs they have. And no hygiene. The place should be burned down there. Harbours diseases and diseased people. Oh, darling, she drank some water too. Some filthy Maori water. Oh, Oh. (112)

白人たちはマオリの人たちを「病んだ人々」(diseased people)と考え、そして彼らを「野蛮人」(savages)と呼ぶ(112)。白人たちは自分たちのやり方が一番と考え、異なるやり方の人々を認めようとせず、病気のイメージで捉え、また野蛮人と言う。白人たちにとってみれば、異なる人種が存在自体が野蛮で汚くて、危険である。結局は自分たちに危害を加えるものとして捉えているのだ。

それらを聞いても、無邪気な二人は理解できない。女の子はあんなにも海を見て喜び、自分から腕のなかに飛び込み抱き付いてきたのと思うばかりである。

そして二人は家へ帰りたがったが聞き入れられず、牢屋に留め置かれることになった。それを知ったとき、二人は途方に暮れて、暗闇の中に、自分たちがパケハのお腹の中の暗闇に閉じ込められた気がした。

And the two women realized by the tone of his [Hasbrick's] voice that

they would be lost — gone into the stomach of the Pakeha, gone into the realm of night. (113)

Ihimaera はパケハこそ人食いをするというのだ。自分たちの価値観しか認めず、異なる価値観を持つ人たちを法律という名において自由を束縛し、取り締まろうとする彼らの行為は人食いであると訴える。

その晩二人は「初めての部屋 (strange room) の自分たちに合わない (foreign) マットの上に横にならなければならなくなった」(112)。マオリの世界を中心に考えれば、白人の世界こそ見慣れぬ (strange)、合わない (foreign) ものであふれている。このような初めての環境に閉じ込められて、Kuini は自分の中の何かが、エネルギーが消えていくのを感じる。

At that moment, something died inside her, something that had been her strength all her life. She felt it ebbing away, slipping away, leaving her a mere husk. (113)

マオリの二人の女性は鳥のイメージで語られ、牢屋という籠の中に無理やり閉じ込められ出たいともがきながらも出ることができずに、生命力を失い、死んでいく鳥の姿と重ねられている。作品の結末における “The syllables drifted like two birds beating heavily eastward into the night. Then the light went, everything went, life went” (114) という文章は、彼女たちが死んでいくことを暗示していよう。パケハたちは自分たち白人の子供を可愛がってくれたマオリ人の女性の自由を奪い、殺してしまうのだ。

この作品にはパケハのマオリに対する無理解と無知と横暴さが描かれている。偏見によって異なる価値観や秩序の人間を攻撃し捉え閉じ込める彼らこそ、野蠻であり、人食い人種である。

IV

このように Ihimaera の “The Affectionate Kidnappers” は Mansfield の “How Pearl Button Was Kidnapped” の続編として書かれているが、作品の

主張は全く異なる。Mansfield のほうがマオリの価値観を全面的に肯定し、主人公の Pearl が今までと異なる文化に触れて喜びにあふれる様子を描くことに焦点を当てているのに対し、Ihimaera のほうは自分たちマオリに対するパケハの偏見と迫害を訴え、自分たちがいかに誤解されているかを前面に押し出している。Mansfield のほうがマオリのひとびとにたいして好意的であるのに対して、Ihimaera のほうは白人に対して非難がましい。すなわち Ihimaera は Mansfield のマリオへの好意を理解することはなく、ひたすら白人の自分たちへの偏見と差別とをうったえている。Mansfield をパケハのなかに十把一絡げに括りあげ、彼女のマオリにたいする姿勢を個別に見ることはしていない。これでは Ihimaera は Kuini と Puts たちを区別できないパケハと同じことになる。Ihimaera はこれを Mansfield に対する「答え」(response) (10) として差し出している。Ihimaera のこの Mansfield への姿勢、つまり彼女や彼女の作品を理解していないことが、我々に異和感を与えるのである。

では、何故、Ihimaera はこのようなことをするのだろうか？ それは、彼がこの作品を執筆した 1988 年においても（この本を出版する 1989 年においても、）Mansfield が願ったようには New Zealand が二つの文化の統合した国になっていないことへの、それどころか、相変わらずパケハ中心の国であることへの抗議を表したかったからである。20 世紀後半においてマオリ復権運動が高揚し、1987 年に「マオリ言語法」が制定されて New Zealand はマオリの言語も公用語に採用した。現在では、公共の場所の標識は英語とマオリ語の二つの言語で書かれている。しかしながら、少なくとも、Ihimaera が執筆した当時においては、バイリンガルなのはマオリ族だけである。相変わらず英語しかわからないパケハは多い。

この短編集にはマオリの言葉が頻繁に登場するが、それはバイリンガルでないパケハへの挑戦状に他ならない。たとえば、Kuini と Kuia が Pearl をマラエに連れてきたとき、Old Joe は Pearl に桃を差し出して、“Kei te matekai koe?” と訊く。しかし英語での説明はなく、読者は想像するか辞書

を引かなければならない。また、作品の最後近くになって、英語とマオリ語とが混じり合うが、マオリ語のわからない読者は同じく想像するか辞書を引かなければならない。

‘Anei, te roimata toroa.’ The soft sounds of waiata swells in the darkness like currents of the wind holding up Kuini’ words. ‘E noho ra, Pearl But-ton,’ kuini said, ‘taku moko Pakeha.’ (114)

マオリならこの作品全体を無理なく読めるが、パケハのなかには難解と感
じる者も多い。

すなわち、このマオリ語を理解しないパケハがいるように、Ihimaera は
二つの文化と人種の統合にはパケハの歩み寄りも必要と感じている。New
Zealand はバイリンガルで、バイカルチャーの国であるにもかかわらず、す
なわち対等で同価値の二つの文化が統合した国であるにもかかわらず、⁵ バ
イリンガルで、バイカルチャーなのはマオリ族だけで、パケハの中には相
変わらず英語使用のみの者も多い。二つの文化統合の用意がないパケハが
多いことを Ihimaera は気づかせ、注意し、抗議している。

さらに言うなら、マオリ語を理解しないことは、マオリ族を理解しない
ことの象徴である。Ihimaera の “The Affectionate Kidnapper” において酋長
Hasbrick が Kuini と Kuia にパケハが彼女たちの行為をどのように受け止
め考えるかを説いているように、パケハはマオリを偏見をもって見つめ、
マオリを正しく理解していないし、理解しようもしない。パケハはマオリ
を「野蛮人」としかみないのである。彼らを「野蛮人」としてひと括り
に捉え、一人ひとり個別に見ることはない。実際、マオリ族を「野蛮人」
と捉える見方は 20 世紀にわたって残っていたようだ。Saikat Majumdar は
1954 年に出版された Elsdon Best の *Spiritual and Mental Concepts of the
Maori*.⁶ を取り上げ、Best がマオリ族に対して “a barbaric folk such as the
Maori” という言葉を使っていることを指摘しているが (127)、Ihimaera が
この作品を書いた時代においてもマオリ族にたいして偏見を抱いている白

人がいても無理はないと思える。Ihimaera はこの偏見を明らかにし、人のよいマオリの老婦人の戸惑いと哀しみを描くことによって、正義を訴えているのだ。

表面上は二つの文化と人種は統合しているように見えても、New Zealand 社会においては文化の異なる二つの世界は百年たっても真の意味で統合されることはなく、Mansfield が願ったようにはアロウの花は咲かないことになる。Mansfield 生誕から百年経って書かれた Ihimaera の作品群は、ニュージーランドにおいてまだ二つの文化と人種が同等な関係で統合していないことを示している。少なくとも、作品から見る限り、白人への挑戦状と読めることから、Ihimaera はそう感じている。

Mansfield 生誕百年のお祝いに当たって書かれたこの短編集は、Mansfield が New Zealand の国民的作家であればこそ、特にパケハが誇りにしている存在であるからこそ、その価値を十分知っている Ihimaera がパケハの読者に向かって二つの文化の統合の真の意味を考えてほしいと願った作品である。もちろん、マオリ族の士気の高揚も目的とされている。

注

1 Ihimaera の短編集は、Ihimaera Witi, *Dear Miss Mansfield: A Tribute to Kathleen Mansfield Beauchamp*. Auckland: Viking, 1989, print を使用。この短編集の冒頭に“A Letter Dear Miss Mansfield”がある。

2 Pakeha はマオリを先祖に持たない白人、特に New Zealand に暮らす白人のこと。

3 Ihimaera の短編集の中には、確かに下敷きにはしているものの、Mansfield のどの作品を下敷きしているのか見当つけることの難しい作品もある。例えば、“Cat and Mouse”は“The Life of Ma Parker”を、“Royal Hunt before the Storm”は“Something Childish but Very Natural”を下敷きにはしているらしいのだが、主人公も異なり、作品の一部が重なりとして暗示されているだけであるために、Mansfield の作品をよほどよく知っている者でないかぎり、読んですぐに判するというわけではない。

4 Mansfield の短編集は *The Collected Fiction of Katherine Mansfield, 1898–1915*, eds, Kimber, Gerri and Vincent O’Sullivan, Edinburgh: Edinburgh UP, 2012, print を使用。

5 1840 に The Treaty of Waitangi が結ばれ、マオリ族と New Zealand 入植者とは共にイギリス女王陛下の保護下に置かれることになったが、実際には不平等であっ

たことを Ihimaera はかなり意識してこの作品を書いていると思われる。

6 Best, Elsdon. *Spiritual and Mental Concepts of the Maori*. Wellington: R. E. Owen Government Printer, 1954, Print.

引用文献

Best, Elsdon. *Spiritual and Mental Concepts of the Maori*. in Majumdar Saikat.

Ihimaera Witi, *Dear Miss Mansfield: A Tribute to Kathleen Mansfield Beauchamp*. Auckland: Viking, 1989, Print.

Mansfield, Katherine. *The Collected Fiction of Katherine Mansfield, 1898–1915*. Eds, Gerri Kimber and Vincent O’Sullivan, Edinburgh: Edinburgh UP, 2012, Print.

Majumdar Saikat. “Katherine Mansfield and the Fragility of Pakeha Boredom,” *Modern Fiction Studies*. Vol. 55, No. 1 (Spring 2009).

Williams, Mark. “On the Beach: Witi Ihimaera. Katherine Mansfield, and the Treaty of Waitangi,” *Tropes and Territories*. Ed. Marta DVCRAK and W. H. New, Quebec: McGill-Queen’s UP, 2007. Print.